



## 『観経』の言葉（表紙）の深読み

今月の表紙の言葉の箇所を善導大師は「別選所求」べつせんしよぐ「請求別行」しよつぐべつぎようと言われています。「別」という字が使われていますがこれは特別なという意味で、それまで漠然と憂いや悩みのない世界を願って求めている韋提希夫人ですが、お釈迦さまの身業説法しんごう（お身体全体での説法）のおかげで今初めてはつきりと「極樂の阿弥陀さまのみもとに参りたい」と言葉にすることができたのです。夫人はお釈迦さまの説法によってみずから本当に帰すべき処に気づくことができました。それは自分が心の深いところまで無意識ながら願っていたところでしたが初めてそのように自らの口で言うことができたのです。しかも驚くべきことにそれは自分が気づく以前より仏さまの方から願いかけ呼びかけてくださったことに気づいたのであります。今や夫人は自身が求め願うところが明らかになりました。私たち真宗の門徒はみな阿弥陀仏の極樂浄土に生まれることを願っているのですがこの夫人のようにはつきりと表明することは

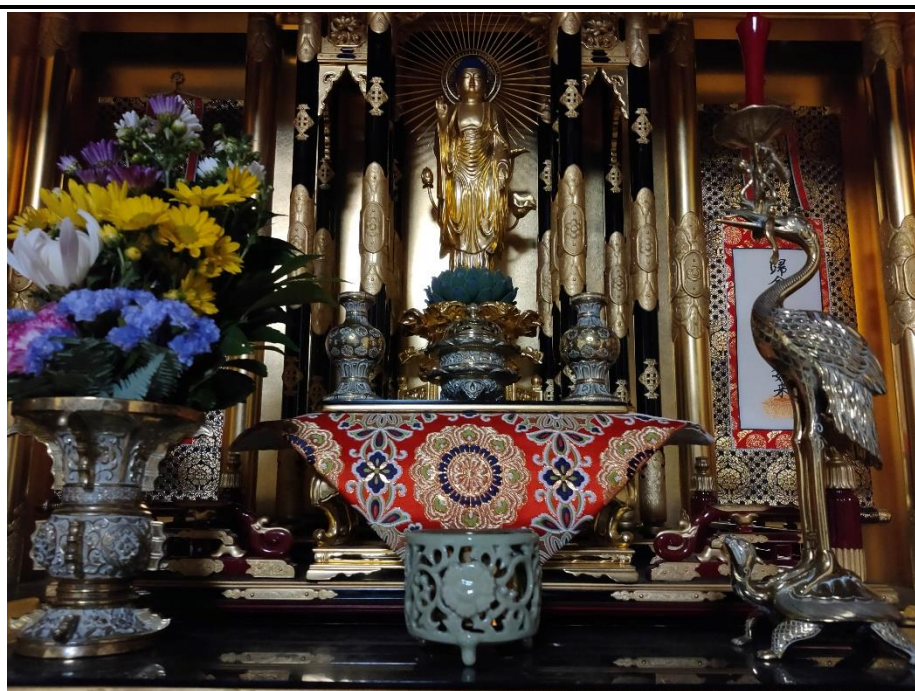
なかなかできません。はつきりと求め願うことができるということは裏返せば阿弥陀様の声をはつきりと聞き受け取ることができたことになります。このようになれば韋提希夫人の憂いの種である息子アジャセのことやまた幽閉のち死に至らしめられた夫のビンバシヤラ王のことなどを自らの身の上で起こったこととして受け止めて受け入れることができたでしょう。その時初めてそのことを超えられるのです。韋提希夫人にとってみたら「王舎城の悲劇」をもおかげさまだったといただくことができたでしょう。

韋提希夫人は「教我思惟 教我正受」と言われています。思惟とは考える事、対象を分別する事です。阿弥陀仏のおそばに行きたいと立ち上がった夫人はお釈迦さまに「どうか私にどのように考えればよいのか教えてほしい」と願いますがすぐに「私はただ受け取るだけです。どのように受け取ったらよいか教えてください」と言い直すのです。この言い直しにはどういう意味があるのでしょいか。夫人は王舎城の悲劇に遭ってからその原因をいろいろと考えてきました。あのことが良

くなかったのか、もっとこうしたら良かった、などと自分の頭で考える事をしてきました。しかしお釈迦さまの説法を通して阿弥陀仏のお声に接することができた今、心からその世界へ行きたいと願いました。しかし長年頭で考える事をしてきた夫人はここでもまた考えようとしたのです。「私を助けずにはおかない」という阿弥陀様のお心に接したにもかかわらず、そのことをまた自分流に解釈しようとしたのです。しかし夫人はそのあとすぐに思い直して「いいええそうではありません。考えることは必要ありませんでした。ただ阿弥陀様のお心をどのように受け取ればよろしいのかお教えてください」と言い直します。これまで夫人は自分という存在を基準にして何事も考えてきました。このことは韋提希夫人だけの問題ではなく、常に自分を中心にして考える事は私たちも全く同様であります。しかし「よき人」お釈迦さまを前にした夫人はここで思い返すことができたのです。お釈迦さまと韋提希夫人は師と弟子であり二人がかりで私たちに大切なことを教えてくださいます。

## 仏事あれこれ

今回は三具足の中の一つ、香炉についてお話をいたします。  
香炉とは文字通り香りを仏前にお供え



するための道具ですが、その起源はインドにあります。年間通して温度・湿度の高いインドでは、昔から体臭を消すため

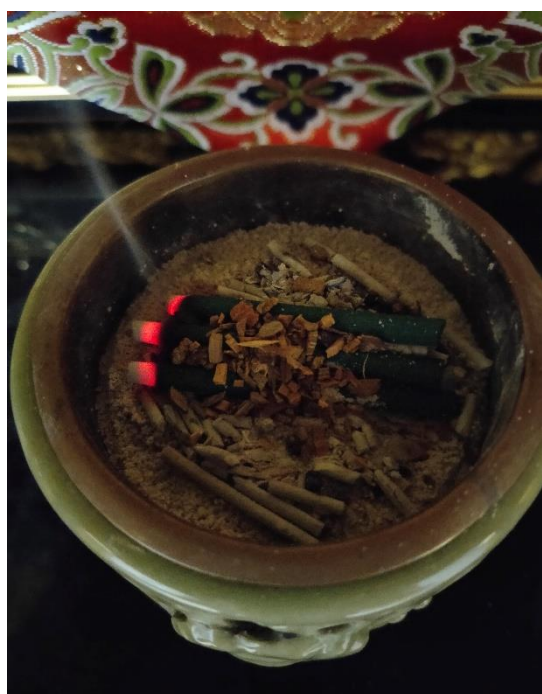
に香を焚く文化があり、宗教儀式の際には香を焚くことで臭いを消し、場を浄化させていました。

その文化が仏教とともに日本に伝わり、現在の法要にも取り入れられています。日本に伝わった当初は、櫛（しきみ）やあせびの葉を乾燥させたものを敷き、それを乾燥させた茸で燃やして香を焚いていました。これを燃香といっています。

その後、十六世紀に中国から線香が伝わり、以降燃香の代用として広まります。

大谷派では線香を折り香炉に寝かせる形でお供えしますが、それは燃香の名残です。

香炉の供え方については鶴亀（蠟燭立）



と華瓶の間に、三本足の一本が正面に来るように置きます。

そして、香炉内に収まる大きさに線香を折り、燃えている方を左にして寝かせてお供えします。勤行中常に香を焚いている必要はなく、部屋全体に香りが行き渡っていれば充分です。ちなみにご家庭のお内仏（お仏壇）の香炉の底をチェックしてみてください。左図のように「欽古堂」と刻印があれば香炉としてたいへん良いものですので大切に使いください。左の香炉は

「欽古堂香祐」（きんこどうかめすけ）の作で江戸時代後期の物です。（若院）



## お知らせ

### ○春の彼岸会法要

今回も新型コロナウイルス対策として通常の方法では行わず慈雲会役員数名が門徒代表として本堂に参拝し、法要を執り行います。その様子は昨年秋の彼岸会法要と同様に三月二十日(土・祝)午後二時よりYouTubeにてライブ中継配信いたします。🔍(検索マーク)の所に【慈雲山瑞蓮寺】と入力してご覧になってください。またYouTubeと瑞蓮寺のホームページにアーカイブ(記録・保存)しますのであとからでもご覧いただけます。内容・法要(約40分) 法話(若院・住職各15分)

三月十七日(水)の彼岸入りから三月二十三日(火)の彼岸明けまでの期間は午前十時より午後四時まで本堂並びに納骨室を開放しておりますのでどうぞいつでもご参拝ください。

### ○お磨きのご案内

今年度も六回お磨きをいたします。どうぞ皆様のご協力をお願いいたします。午前中に終了いたします。

三月十六日(火) 午前九時  
五月十八日(火) 午前九時  
八月一日(日) 午前八時三十分  
九月十七日(金) 午前九時  
十一月十一日(木) 午前九時  
十二月十九日(日) 午前九時

### ○会費納入について

令和三年度の会費五千元を納入いただきますようお願いいたします。同封の「電信払込み請求書・電信振替請求書」をお使いいただければ結構ですが、ゆうちょ銀行の口座をお持ちでしたら電信振替を利用してATMで送金していただくお手数料は100円です。(昨年四月からかかるようになりました。申し訳ありません。)窓口で手続きしていただきますと手数料は146円かかります。電信払込みはゆうちょ銀行の口座をお持ちでなくても使用できますが直接現金で払込み、手数料が550円と高めです。もちろんお参りでお宅へ伺った際やお寺へ参られた際に収めてくださっても結構です。すでに今年度分をいただいているご門徒にはこの用紙は同封しております。

## 編集後記

この春の彼岸会法要も全門徒さまへの参拝案内ができずに世話方(慈雲会役員)による代表参拝とさせて頂いたこととなりました。去年の春彼岸会も新型コロナウイルスが広がり始めた為中止としましたので丸一年が経ちました。毎年春秋の彼岸会法要に参拝するのを楽しみにしておられるお同行どうぎょう(門徒)の事を思うと心苦しいばかりです。そのような中、先日大阪のご門徒さまから電話があり、昨年九月の秋彼岸会法要の様子をYouTubeで見えて家に居ながらお参りさせていただきました、と報告してくれました。娘さんがYouTubeに接続してくださったそうです。たいへんうれしいお知らせでした。コロナが収束し通常通りお寺の行事ができるようになります。外出しにくい方や遠方にお住みの方もどうぞ画面越しではありますが一緒にお参りください。私たちも画面の向こうに大勢のお同行が参ってくださいっていると嬉しいながら法要や行事を運営していきたいと思えます。